

## 研修報告書

京都大学公共政策大学院修士一年 池上 京

インターン先：カンボジア事務所

### 1. インターン先概要

SVAは1980年、カンボジア難民キャンプで、子どもたちに絵本を届ける活動をきっかけに設立されたNGOである。現在、SVAは、タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ、そしてアフガニスタンに展開して活動し、アジアの子どもたちへの教育・文化支援を通じて、地球上のあらゆる人々が、お互いの違いを尊重しあい「共に学び、共に生きる」シャンティ(平和)な社会の実現を目指している。

カンボジア事務所は今年で20周年を迎える非常に古い事務所である。主な事業内容は学校建設、スラムでの移動図書館・読み聞かせ、図書館普及、自然保護であり、フォーマルセクターとインフォーマルセクターの2つの部署が事業を分担して担当している。

### 2. 応募動機

私は将来、紛争予防や平和構築を通じた、機会の均等に携わりたいと考えている。そのためには平和学のみならず、幅広く現在の国際情勢を理解し、分析する力をつける必要があると考え、学部時代のゼミでは国際政治学を専攻した。サークルも模擬国連という、政府代表に扮して国際会議のシミュレーションを行う活動をし、インプットした知識をアウトプットすることを通じ、より一層の理解の深化を図ってきた。

そうした形で私はある程度しっかりと勉強をしてきた。ただ、サークルとゼミに打ち込みすぎたため、なかなかまとまった時間を取ることができず、学部時代は海外を回ることはできなかった。そのため、それらを通じて得た知識、議論にはどこか机上のものにすぎない空虚さを感じられた。

それではせっかく得た知識も十分に意味をなさないという考えに至り、今春アフリカと中東を一カ国ずつ回った。その経験は素晴らしいものであった。それまで貧困問題、環境問題、移民問題、紛争問題等、机に向かって学んできた様々な知識がどのように絡み合い、発露しているのかを肌で感じる事ができた。

現在大学院でもグローバルな政策課題について学んでいるが、現場を見る機会に限られており、もっと現場に関わる機会を得たいと感じ、本プログラムに応募した。

### 3. 参加目標

研修参加に当たり、以下の3つの目標を設定した。

#### ① カンボジアという国についての理解

これまでいくらか海外に行ったことはあったが、それらはあくまで旅行という形態

をとったものであり、その国の病巣を垣間見る機会は限られていた。今回は都市部の華やかな街並みのみならず田舎や都市貧困地域といった非常に難しい地域も目にする機会があり、国を広く見つめる良い機会である。4週間という期間で可能な限りカンボジアという国の今ある姿を知りたいと考えた。

## ② 国際協力の現場の理解

国際協力について、上述のように座学では多くを学んできた。しかし、それらが実際どのように行われ、何に注意すべきであり、どのような困難があるのか、といったことを知る機会は残念ながらこれまで無かった。国際協力に実際に携わり、学びたいと考えた。

## ③ 自分が何をしたいのかの理解

今回一番私が得たかったのは、私の興味分野、覚悟の理解である。まず、ひとえに国際協力と言っても、そのあり方は多様である。平和という観点からの機会の均等が自分が達成したい最優先事項であるのか、その手段として、政策策定に携わりたいのか、それとももっと現場に近い場所に関わりたいのかを確認したかった。また、社会に出てしまう前に、そもそも本当に将来自分は国際協力を職とする覚悟があるのかを確認する必要もあった。

## 4. 活動内容

今回、私はフォーマルセクターで研修させていただいた。フォーマルセクターでは主にドナー向けの提案書・報告書等の書類翻訳、学校建設等現場視察同行を行った。加えて、インフォーマルセクターのスラムでの活動や図書館への絵本届同行、植林活動などにも参加した。また、イベントの準備や、他団体訪問も行った。

### ① 翻訳

オフィスでは主に書類の翻訳を行った。NGOの資金源は主には他者からの寄付である。JICAの草の根協力金等も活用するが、ドナーからの寄付が占める割合はやはり大きい。しかし、日本がたとえ豊かになろうとも、ドネーションの文化は欧米諸国に比べればやはり浸透しておらず、資金のパイは限られた状態にある。そのような中で、ドナーへの提案、報告は説明責任の観点からも非常に重要である。

### ② 出張

現場に出る機会も多くいただいた。カンボジア滞在期間のうち1/3は出張でプノンペン以外の地域を見ることができた。とりわけ、SVAの建設中、もしくは建設後の小学校は数校拝見した。建設モニタリングという形での同行もあれば、建設後、ドナーのプレートの修

理のために同行したこともある。SVA ではドリームスクールと呼ばれる、地域のモデル校設立プロジェクトがある。これは小学校にどこか欠陥が多いカンボジアで、良いモデルとなるような小学校を建設し、波及効果を狙うものである。そのため、準備から設立後の監督まで非常に慎重に行われる。実際そのような学校がどのように機能するかを目視することができた。

その他、ドナーのために児童に絵を描いてもらうための付き添い（ドナーの求める絵の具体的な方向性の通訳）、SVA で作成した絵本の図書館への移送、以前植林した地域のモニタリング、ドナーのカンボジア訪問のための付き添い出張も行った。

### ③ スラムでの移動図書館活動

スラムで行う移動図書館活動にも参加した。カンボジアにはいまだ多くのスラムがあるが、その環境は言語に絶する非常に劣悪な環境にある。学校に行けない子供たちも多数いる。そのような状況下の子供たちのため、移動図書館で絵本を読む機会を提供する。これにより学びの場を提供し、学習意欲向上、識字能力向上を図っている。

### ④ 他団体訪問など

今回、自分のプログラム参加目的を踏まえ、現地オフィスの方々には多くの他団体訪問を組んでいただいた。教育分野に限らず、様々なフィールドで活躍する他の NGO、国連・世界銀行等の国際機関、JICA などである。また、カンボジアの図書館も訪問した。

カンボジア訪問期間に行われた、日本人会による震災復興イベントのお手伝いもさせていただいた。この時偶然知り合った日系企業現地法人の方にお話を伺いに会社を訪問させていただいたりもした。また、SVA カンボジアオフィスの山本所長から日本大使館職員の方もご紹介いただき、お話を伺った。

### ⑤ 博物館・遺跡訪問

折角カンボジアに来たので、当然観光も行った。しかし、今回限られた時間ということもあり、自分が将来携わりたい分野であり、かつカンボジアが抱える最大の闇でもある、ポルポト時代の虐殺に関して目にする機会が多かった。ポルポト時代に刑務所として利用され、生還者は 7 名のみという悪名高いトゥールスレン虐殺博物館、処刑の舞台となったキリングフィールド、不発弾と地雷処理を行うカンボジア人アキラさんの地雷博物館などを訪問した。また、アンコールワット等の遺跡も訪問し、異なった文化を目にする機会も得られた。

## 5. 得られた学び

このインターンを通し、多くの学びを得ることができた。以下、当初掲げた目標に則して記述する。

## ① カンボジアに関して

これまで、カンボジアというと、ポルポト、虐殺、地雷、貧困、そうした負のイメージしか思い浮かばなかった。では今のカンボジアはどのようなのか。

実際のところ、未だカンボジアは多くの課題を抱えている。教育に関して言えば、ポルポト時代に知識階級の 80%が失われたこと、学校施設の多くが破壊されたことから、教育は質・量ともにまだまだ不足した状態にある。供給が不足しているのであれば、援助してガンガン立てればよいという考え方もあるだろうが、残念ながら需要がない。すなわち、教育への親世代の理解不足ゆえに、就学率は高くても退学率が非常に高いのである。貧困ゆえに学校にやれない世帯も多いが、十分な学校教育なしでも生活できる状況下で、教育のプライオリティが低い状態にある。また、教育省の出すデータも正確な統計に基づいているとは言い難く、就学率 95%という数値も非常にあやしい。小学校卒業時には生徒数は半数以下に落ち込む。

教育以外の面でも問題は多い。教育不足ゆえに国のリーダーとなるべき人々の能力は他のアジア国に比していまだ高くない。また、ボトム層の教育水準が非常に低いため、なかなか国の発展、産業の成熟は困難な状態にある。そのような中、開発は進むが、富の分配は一部の人々にのみなされ、格差は広がる。さらに、環境破壊も進み、発展は歪な形で進んでいるとみられる。

他方、カンボジアには光もある。既述の多くの問題に関して、進展がみられるのは事実である。内戦終結後すぐの 10 年前に比べ、学校の数や就学率は大幅に改善されているし、治安も非常に良くなっている。企業が数多く進出し始め、雇用の拡大が今後見込まれる。何より、10 代、20 代には非常に優秀な若者が多くおり、国の発展のために、熱心に学び、働いている。彼らを中心に、アジアの発展をリードする国となることを願う。

## ② 国際協力の現場について

今回の最も大きな学びはオーナーシップとサステナビリティの重要性である。これまで、援助というものは自力では力のない人々の支援であり、援助側が可能な限りのことを行うべきであると単純に考えていた。しかし、実際には、援助の先まで考えなければならない。すなわち、支援を引き上げる際のことを考えた際、その後自助で国の発展を持続していかなければならないことを考えなければならない。そのために政策従事者、NGO、現地住民のキャパシティビルディングがなされる形で支援を行わなければならない。SVAにおいても日本人スタッフは 20 名近いスタッフの中で、5 名程度だった。

また、多くの問題の相互関係性も感じた。これまではどこかに本質的な課題というものがあり、その課題を解けば問題は自然と解決されていくと考えていた。しかし、コトはそのような単純なものではない。多くの issue が相互に複雑に絡んでいる。例を挙げると、ジェンダーの問題は多くの面で影響を与える。親が女子を学校に行かせない、職につきがたい、家庭内暴力をまねく。他方、教育もまたジェンダーの原因となる。女子の教育が進ん

でないため、女性の地位が低くなる。このような卵が先かニワトリが先かのような議論には意味がなく、それらに包括的にアプローチすることが必要であると言える。しかし、そのためにはリソースは限られている。その配分を以下に効果的にプライオリティをつけて行うか、難しい課題ではあるが、それこそが肝要である。

### ③ 自分が何をしたいのか

そもそも、やはり自分は人生のどこかのポイントで国際協力に携わりたいと考えた。自分が許せないものがそこにはあまりに多くある。それは価値観の問題だが、許せないことに一生関わらず放置できるような人間では私はない。そのうえで、アプローチしたい分野に関して、結局のところ私は機会の均等が達成したいという結論に至った。やはり自分が最も許せないのは、機会の有無が生まれる環境という運の要素に大幅に左右されてしまう、理不尽な不公平性にあると感じた。そこに対して自分は何らかの形で関わりたい。しかし、そのような機会の均等の要素は紛争以外にも様々なものがあることを改めて認識し、自分がどのフィールドにアプローチしたいのかはむしろぼやけてしまったような感覚もある。一方、平和という当たり前の環境が当たり前ではない状態になった後に生じる悲劇もまたリアリティを持って感じることができ、平和という分野への興味は一層増したのも事実である。

アプローチの手段に関して、私はやはり政策に関わりたい。NGOのようにプロジェクトレベルで問題解決を行うことの重要性は非常に感じたが、自分の **Nature** として、政策というルール、ビジョンを描く立場からアプローチしたいと考えた。他方で、政策マンとして働くにしても、デスクの書類としか向き合わないような人間にはなりたくない。そうやってモグラのようになってしまい、政策内容が机上の空論に陥ることは避けたい。常に現場を意識し、自ら能動的に現場を知る、そんな関わり方のできる人でありたいと考えた。

## 6. 最終報告で行った提言

最後に、インターン最終日に行った提言について記述する。

### ① 他分野と絡んだ絵本

先に多くの **issue** が密接に絡んでいると記述したが、私は **SVA** の有する絵本という既存の手段を上手く利用できないかと考えた。すなわち、衛生教育やジェンダーの平等といった、社会問題にかかわる絵本や紙芝居を行い、幼少期にその重要性を学ぶのである。

### ② ビジネス・NGO 連携

現在多くの日本企業がカンボジアに進出を進めているが、カルチャーの違い等の理由から、優秀な人材を上手く確保できていない。その点、**NGO** が有するコミュニティとの関係を活用し、ビジネスの進出を助ける代わりに、寄付をいただいたり、企業（もしくは中小企業連合）と合同で職業学校を建設することが考えられる。職業学校建設により、企業は

優秀な人材を自前で育成して登用することが可能であるし、SVA としては職業学校というある種ゴールの見えやすい状態を作ることによって子供たちの退学率を下げられるというメリットが考えられる。

③ フォーマルセクター、インフォーマルセクター間の連携

現在フォーマルセクターとインフォーマルセクターは異なった州で事業を行っている。また、相互の交流も限定されている。しかし、両者が共同で活動することによって生じるシナジーが想定され、連携には大きな意味があると考えられる。具体的にはドリームコミュニティプロジェクトというものを提案したい。すなわち、図書館建設、学校建設植林活動といった活動を全て同じ村内で行い、より強い協力姿勢を村に促すのである。また、村のキャパシティ向上にもつなげることができ、少ないリソースの効率的利用にもつながるのではないかと。

以上